

フェルナン・クノップフ作《私は私自身の上に扉を閉ざす》再考
 —モチーフの象徴的意味をめぐって—

矢追愛弓（九州大学大学院）

《私は私自身の上に扉を閉ざす》（1891：ミュンヘン、ノイエ・ピナコテーク蔵）（以下、《私》）は、19 世紀末に活躍したベルギー象徴派の画家、フェルナン・クノップフ（1858-1921）の代表作の一つである。その多くが文学と密接に関連するクノップフ作品の中でも、英国ヴィクトリア朝期を代表する女流詩人クリスティーナ・ロセッティ（1830-1894）の詩「誰が私を救うべき」（1864）に基づくことで知られる。しかし先行研究では、本作品とロセッティの詩との関連については、この詩が示す内省的な精神へのクノップフの共感が指摘されるに留まり、いまだ十分に考察が行われていない。よって本発表では、まず「誰が私を救うべき」の内容を確認する。そしてその内容が《私》にいかに関係しているかを、画中のモチーフの検討などを通して考察する。

ロセッティの詩中に看取されるのは、登場する「私」の、①現実からの逃避願望による外界の遮断、②外界の遮断という状況下で起る制御し得ぬ自己の自覚、③救済の希求の三点である。①については、《私》では室内という設定により端的にその状況が表わされているのと同時に、クノップフ自身が獲得していた造形語彙の導入により、それが己の内面への逃避であることが示唆されていることを示す。②については、画中の女性に付与された身体的特徴や服装などが示すその性格に注目したい。ロセッティの詩において、制御し得ぬ自己は己を堕落へと誘う誘惑者の性格をもっているが、《私》の女性が有する身体的特徴は、その所有者が誘惑者であることを観者に伝えるものである。しかし一方で、この女性の服装や姿勢に着目すると、それらはむしろ、所有者を誘惑に悩む被誘惑者とみなすように促す。つまりこの女性には、誘惑者でもあり被誘惑者でもあるという二面性が与えられていることがわかる。そして③については、ギリシア神話において眠りを司るヒュプノス神の存在が重要となる。「誰が私を救うべき」で、ロセッティがキリスト教の父なる神に救いを求めているのに対し、《私》ではヒュプノスの頭像が登場している。この大きな相違点に着目するならば、敬虔なキリスト教徒であったロセッティとは異なる、クノップフの異教的とさえ言える独自の思想が浮かび上がってくる。

以上の考察からは、クノップフが、ロセッティの詩に表わされている、内面における制御し得ぬ自己の自覚と救済の願望とを汲み取り、自身の造形語彙を用いてそれを絵画化したということが明らかとなる。19 世紀に研究が発展した無意識の問題にも結びつくこの主題は、彼自身にとって重要な命題であったのだ。発表では、晩年にクノップフが建てた館の特徴とそこでの彼の生活を振り返り、クノップフ自身が《私》の女性のような在り方を体現していたことにも触れたい。